



ナマステ ネパール

香川県小豆島町立苗羽小学校

担当教科：体育

母倉 秀敏

◆実践教科：生活 ◆時間数：5時間 ◆対象学年：小学1年生 ◆対象人数：19名

カリキュラム

◆実践の目的

小学1年生では、生活科の時間を活用して、例年国際理解教育に関する学習に取り組んでいる。そこで、ネパールの様子を知る活動を通して、自分たちとの共通点や違いを見つけ、共感したり尊重したりする態度を育てたい。対象が1年生ということで、異文化を認めるというところを重点的に指導し、豊かな感性を育む場としたい。

- ・ネパールの生活について知り、その良さに気づく。
- ・日本の生活と比べて、ネパールの生活の共通点や違いを考える。
- ・いろいろな見方や考え方に気づき、ネパールの文化を受け入れようとする態度を育てる。

ココがすばらしい!

- ・先生自身も楽しんで子どもたちに伝えようという姿勢がよかった。
- ・ネパールの「神様」をキーワードに、具体物を多用し、小学一年生にも無理なく異文化を伝えることができた。
- ・ミティラー・アートの壁掛けからネパール人たちの生活様式を読み解くという作業が、興味深くて良かった

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ネパールの生活について知ろう	(1) ネパールの絵を見て、気がついたことを付箋に書く (2) クイズをしながら、ネパールの生活を知る	(1) ネパールの絵 (2) パワーポイント
2	ネパールの神様について知ろう	(1) お面を見て、気がついたことを書く (2) ヒンドゥー教の神様について知る	(1) ネパールのお面 (2) あやつり人形
3	ネパールの音楽について知ろう	(1) 音楽クイズをする (2) ネパールの音楽について知る (3) レッサムフィリリを歌う	(1) CD (2) DVD
4	アンモナイトがとれるんだよ	(1) 石を見て、何の石か想像する (2) アンモナイトがとれるわけ	(1) アンモナイトの化石
5	ネパールの子供たち(実施予定)	(1) 学校生活の様子を知る (2) 家庭生活の様子を知る	(1) パワーポイント

授業の詳細

1 時限目 | ネパールの絵を見て

ネパールのことをあまり知らない子ども達に、どんな国なのかを想像させるために、ネパールで手に入れた絵(ミティラー・アート)を見せて、導入とした。学級を3つのグループに分けて、それぞれのグループに違う絵を用意した。その際、付箋を用意して、思いつくことをどんどん記入することで、自由な発想を引き出した。ミティラー・アートのモチーフは、自然界に存在するものがほとんどで、シンプルな農村生活が反映されている。



ネパールの絵 1



ネパールの絵 2



ネパールの絵 3

児童の反応

- ・日本の服と違う。きれいな服を着ている。
- ・帽子をかぶっている。ずきんをかぶっている。
- ・壺を運んでいる。
- ・水をかけている。
- ・おじょうさんがある。
- ・首輪を作っている。



絵に付箋をはる活動

壺を運んでいる女性は、生活に必要な水を運んでいることから、ネパールの水についての話を切り出した。町の至る所に水をくむ場所があり、また井戸水を利用していることも画像を通しておさえた。



水をくむ少女



井戸水も使っています



水を売る少年

井戸水の利用を想像できた児童が1名いた。日本でも井戸は存在するが、利用している家庭は少ない。水をくむ姿は、町の至る所で見られ、「水くみ」という作業が生活の一部となっている。絶え間なく流れ続けるわき水は、自然の恵みであり、山国ならではの風物詩とも言える。同じくらいの年頃の少年が、水を売る姿を見て、自分たちとの違いを感じていた。

写真を見て、何屋さんかあてましょう



アウトドアの床屋さん



くつ屋さん



道ばたのお菓子屋さん

テントの下に椅子を置いて、お店をしている写真は、答えが出にくかった。鏡があることをヒントに出すと床屋と分かった。クラスの中にお家が床屋さんをしているという児童がいるが、道ばたの床屋さんの様子を見て、驚いた表情をしていた。

くつ屋さんの写真では、日本では使えなくなったくつは、処分してしまう実態をふまえて、物を大事にする習慣があることを伝えた。お菓子屋さんはすぐに分かり、児童にとっても興味があるので、手を挙げて発表しようとする児童が多かった。

〈所感〉

ネパールの絵から想像する活動は、児童の主體的な活動となり、1年生なりに自由に想像していた。絵の内容も多岐にわたるので、分析が必要だが、後半のネパールの生活の画像とつなぐ際に絵にもどるよう展開を配慮した。

お店屋さんを紹介することで、どんな仕事をしているか日本と比べて考えることができる。保護者のアンケートの中に、「あっという間に時間が過ぎて、もっと詳しく聞きたかった」という意見もあった。子ども達にどううつるかは、教師自身の感じ方に左右される。その為、どの画像を提示するかが重要な鍵を握っていることから画像選びに時間をかけた。

2時限目 | ネパールの神様

ネパールのお面を3種類用意して、気がつくことや想像したことを自由に画用紙に書いていった。



シヴァ



ヴィシュヌ



クリシュナー

児童の反応

- ・目が大きい
- ・ネパールの女の子
- ・女の子の髪の毛にへびがいる
- ・白いお化粧をしている
- ・おでこに丸いものがある
- ・おでこに目の模様がある
- ・おでこの所にぐるぐるうずまき
- ・帽子の所に、神様みたいなのがいる



何のお面かなあ

いろいろな神様

三位一体 宇宙の始まりから終わり、そして再生

宇宙創造神
「ブラーフマー」
4つの顔を持ち、
東西南北を表す。

宇宙維持神
「ヴィシュヌ」
生活を維持する。
十の化身をもつ

宇宙破壊神「シヴァ」
男性エネルギーに満ちあふれ、ネパール
人に絶大な人気を誇る。

女性に人気のハンサムな神
「クリシュナー」

シヴァの妻
「パールヴァティー」



商売の神様「ガ
ネーシャ」
シヴァとパー
ールヴァティー
の息子

後先を考えない
破壊神バイラブ



ネパールには、330万の神様がいると言われている。
 寺院はもちろん、街角でも山道でも、そこかしこに神様がまつられていて、人々の日常生活と宗教が深く結びついている。いたるところで祈りの風景が見られ、道ばたにある小さな石が神様だったりもする。たくさんの神様がいるからこそ、願い事も叶うわけで、日々のブジャ(礼拝)は欠かせない。



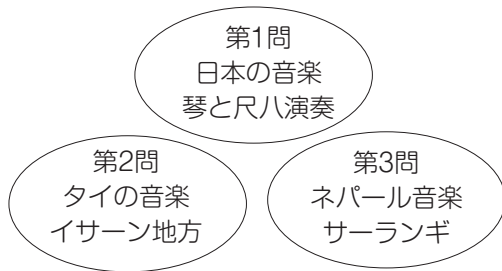
街角で見られるブジャ

〈所感〉

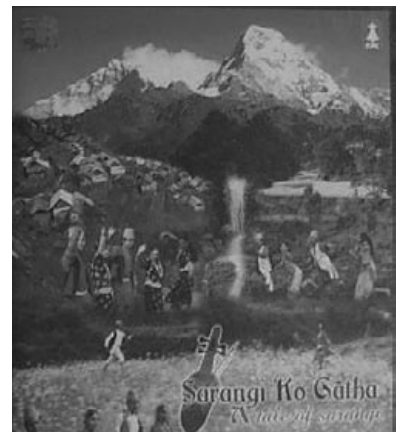
この授業では、ヒンドゥー教の神々を取り扱ったが、それは、ネパール国民の約80%をヒンドゥー教徒が占めているからである。ブッダ生誕の地(ルンビニ)があるにもかかわらず、仏教徒は約10%ほどで、民族によってはヒンドゥー教と仏教が混在している場合もある。ネパールでは、「あなたの宗教は何ですか」と尋ねられて、特定の教団や宗派に属していないからといって、「無宗教」と答えると相手はびっくりするという。日常生活と宗教を深く結びつけている習慣は、日本の生活スタイルとの違いを感じることができる。

3時限目 | ネパールの音楽

- ① 音楽クイズをする。
音楽を聞いて「どこの国の音楽でしょう」
- ② DVDを見る。



サーランギミュージック



- ③ ネパールの国民歌「レッサムフィーリーリー」をみんなでい

〈所感〉

音楽は、ネパール人にとって人生の伴奏であり、重要な民衆芸術の一つである。
 村から村へ、サーランギ(木彫りの素朴な弓奏楽器)を弾きながらさすらいの歌師が行き、神々や人々の物語を歌い聴かせる。「レッサムフィーリーリー」は、ネパールでは有名な音楽で、子どもから大人まで、男女を問わずだれでも口ずさむことができる音楽である。音楽を通して異文化を感じることは、まさに「体験」であった。

4時限目 | アンモナイトがとれるんだよ

この石は、ただの石ではありません。何の石でしょう。

児童の反応

〈所感〉

ヒマラヤは、山国で海に面していない。海洋で広く分布繁栄した生き物の化石が採れるということは、大昔は海だったことの証で、アンモナイトはそれを証明している。山国と海の意外な接点に子ども達は驚いていた。中世代白亜紀末以来、地球上から姿を消したアンモナイトは、地質学研究上極めて重要な生物群である。それが世界の屋根と言われるヒマラヤでも採れるのだから、子どもたちは不思議な感じがしたようだ。

成果と課題(全体を通して)

授業参観日に実践授業を行うことで、保護者にも公開でき、取り組みを見て頂くことができた。参加体験型の学習を取り入れることで、児童自ら自由に想像し、実際と比較して考える場となった。

保護者の授業参観後のアンケートに「ネパールの話を聞くだけかと思っていたが、絵から子ども達が想像する活動があり、進んで学習できていた」との感想があり、「先生の海外での体験をこれからも学校教育に生かしてください」と勇気づけられた。

小学1年生の児童が対象なので、できるだけ実物が学習教材になるよう現地で教材集めを心がけた。それを補うのが、写真などの画像である。子ども達の手で直接触れられるものは、興味・関心を高めるために有効な学習教材になった。

ネパールの学習を通して、同じものを見ても、子ども達それぞれが様々な見方をして多様な考えを発言し、または記述していた。自分たちの生活習慣が全てあたりまえとするのではなくて、他国の文化や生活にふれることで異文化を認める感性を育てることが価値観を広げることにつながると思う。ライフスタイルの多様性に共感する態度は、人権尊重の基盤である。

多民族国家ネパールでは、インド・アリア語族の言語、チベット・ビルマ語族の諸言語など周辺諸国言語を話す民族を始め、公用語のネパール語、微妙にニュアンスが違うネワール語など、様々な言語環境が複雑に共存している。その中で生活していると、英語を話すことが必要かつ必然となってくる。

ネパールの学校訪問では、多くの小学校が英語の学習を導入していた。ホームステイ先の家族は、夕食時の会話が英語だった。平成23年度からの5・6年生「英語活動」は、実施に向けて試行段階ではあるが、島国日本の言語状況は、まだまだ閉鎖的であるように思われる。世界で活躍できる日本人を育てるために、そのツールとなるコミュニケーション能力の基礎を培っていくことが教育現場で期待されている。英語が全てであるとは言えないが、今回の研修で必要性を強く感じたので、そのことも今後の実践を通じて伝えていきたい。



参考資料

【書籍】

・地球の歩き方編集室編（2009）「地球の歩き方ネパール2009年～2010年版」ダイヤモンド・ビッグ社

【映像】

・ネパール音楽 DVD